

緩やかな動員のためのメディア

— 陸軍発行慰問雑誌『兵隊』をめぐって —

中野綾子

はじめに

本稿では、『兵隊』という雑誌が、具体的にどのような兵士（読者）に、どのような兵士像を表現していたのかを考察する。そして、この雑誌が兵士にとっての書くこと、読むことの実践とどう結びついてきたかをとらえる。それは同時に、読み／書くインテリ兵の意識を戦争へと取り込むメディアとして雑誌『兵隊』をとらえることともなる。

『兵隊』は一九三九年五月一日（八号までは『へいたい』）に創刊され、現在までに一九四四年五月の三九号が確認されている。当初は月二回だったが、一三号以降は月刊、その後は数回の休刊を挟みながら刊行された。発行は陸軍南支派遣軍報道部、編集部は広東に設置され、兵士の投稿を募集・掲載したところに大きな特徴がある。

初代編集長は芥川賞受賞後の火野葦平で、一九三八年四月末に馬淵逸雄の斡旋で軍報道部へ転属すると、一〇月には広東作戦に従軍し、そのまま広東に駐屯している。『兵隊』の編集に参加したのはこの頃

からだろう。雑誌は中国大陸前線地域を主な配布場所としていたが、正確な範囲までは判明していない。基本的には非売品で部隊ごとに数冊配布され、回読されていたが、兵士からの要望によって、残部が一部一〇銭で編集部および広東市内の書店で販売されている。

大濱徹也は『兵隊』を、「兵隊が思い思いの世界を書くこと、描くことで、人間たる私を発見する器となり、長期持久戦下の戦場を生きぬく力を養わんとした世界」であり、その世界は「戦地の生の声を記録する」「自由な空間⁽¹⁾」であると好意的に評価している。また、金井景子はこうした共有の場がのちに兵士の積極的な戦争参加へ繋がったとの見解を示す⁽²⁾。兵士を戦争に取り込んでいくという「意識の動員」に、雑誌の共有が関係していた点は、大いに検証されるべきだろう。これら先行研究に対し本稿が問題とするのは次のような点である。一つは『兵隊』の読者層に対する分析が不十分であることだ。今までは、「盧溝橋事件以後、急遽大増員された大衆層の男たち」（前出金井）が、『兵隊』の読者層として想定されてきた。大濱は「ある種の教養

主義の色香がただよって」いることを指摘しているものの、具体的な考察までは至っていない。そこで、一節ではこれまで拙論で指摘してきた読者層の問題をふまえて論じていく。⁽³⁾

次に問題とするのは、雑誌の共有によって、兵士の意識をどのよう
に戦争に積極的なものへと変化させたのかという検証が不十分な点で
ある。金井論文は火野の言説分析を中心とし、大濱論文は「兵士が書
くこと」が大まかなアナロジーで説明されており、具体的な分析に欠
けている。そこで二節以降では、『兵隊』において想定された読者層
イメージがどのようにして兵士の読み、書く行為と接続し、兵士を戦
争へ取り込むことになったのかを、検閲や編集サイドの問題も含めて
考察を重ねていく。

先に結論を述べれば、『兵隊』では二つのインテリ兵像が示されて
いた。一連の考察を通して、『兵隊』では強固な思想統制や検閲より
も、修養主義や投稿制度という「緩やかな統制」こそが、兵士を戦争
へ取り込む仕組みであったことを明らかにしていきたい。

一 『兵隊』の読者層

『兵隊』の読者層についてはこれまでに、同時期・同地域にて配布
されていた慰問雑誌である『陣中倶楽部』との比較から読者層を明ら
かにしてきた⁽⁴⁾。そのため本節では簡単な説明に留めるが、そこからは
インテリ層を中心とした読者層が見えてくる。そこで兵士におけるイ
ンテリ層をとりまく状況についても述べることにしたい。また、本稿

では、旧制高校生文化に代表される学歴エリートを中核とする教養主
義文化圏にある兵を「インテリ兵」として扱う。

陸軍恤兵部では一九三一年頃から「恤兵」という慰問雑誌を刊行し
ていたが、編集を講談社へ委託し、名前と内容を刷新して『陣中倶楽
部』を刊行する。創刊号は『恤兵』の号数を引き継ぎ四二号から始ま
り、『兵隊』と同日に発行され、現在までに一九四四年一月一日の
一〇六号が確認されている。⁽⁵⁾

恤兵部は軍人援護を目的とし、傷痍軍人や帰還兵、遺族の扶養や慰
問活動を担い、国民から恤兵金と呼ばれる献金を受け付けている。『陣
中倶楽部』では、表紙見返しに恤兵金による運営が明記され、『兵隊』
は報道部発行ではあるが、二七号（一九四三・一）に「銃後国民の熱
誠なる恤兵金によつて発行されてゐる」と記されている。なぜ同地域
に兵士用の雑誌が二誌も配布される事態となったのだろうか。

『陣中倶楽部』は、総ルビで大衆小説や講談の読切が掲載されその
紙面は、講談社の『キング』や『講談倶楽部』に酷似した構成となっ
ている。一方『兵隊』は、「兵隊文芸」として兵士の投稿作が掲載され、
読者通信欄が整えられている。娯楽記事や映画紹介、漫画など大衆的
側面も示されているが、ルビがないことから、『陣中倶楽部』に比
べると読みにくさがある。『編集後記』（一一号、一九四〇・一）では
「只単に兵隊の中の文芸愛好者や、高い教養や文章が一定の水準に達
したもののみの『兵隊』である危険があつた」と弁明が行われており、
高いリテラシーをもった読者の存在を示唆している。

とくに投稿作には大きな違いが見られる。『陣中倶楽部』では「陣中文芸」欄に短歌や俳句、川柳が募集されているのに対し『兵隊』は短詩型文芸のみならず、小説や陣中日記、論文など散文が募集され、読物の中心を担う。さらに、掲載小説の方向性も異なる。『陣中倶楽部』で重視された講談や探偵小説ではなく、『兵隊』には銃後への創作書簡、陣中日記や私小説などその内容には純文学からの影響が垣間見られる。

この点から、中国戦線における陸軍発行慰問雑誌は、大衆層をメインとした『陣中倶楽部』から、散文を積極的に投稿するような文学青年などのインテリ層を射程に収めた『兵隊』まで、その読者層はグラデーションのように構成されていたと言える。同地域に兵士が読む雑誌が二誌存在した理由も読者層の違いによるものと考えられよう。では、なぜこのように読者層をとらえることとなったのか。まずは『兵隊』創刊当時の知識階級の兵士を取り巻く状況から明らかにしていきたい。

一九三八年の『兵隊』や『陣中倶楽部』の創刊は、金井や大濱が指摘するように、盧溝橋事件以降の兵士の大量増員の時期に合致する。増員に伴い知識階級の兵士をどのように戦争へ積極的な方向へ変化させていくのかという「意識の動員」問題が浮上するが、その対応の一つとしてインテリ兵の描かれ方が、次に見るように変化していく。

奥野他見男『大学出の兵隊さん』⁽⁶⁾は、日中戦争前の一九二八年に発売されたベストセラーである。この作品は学歴を自慢する法学士の兵

士を主人公とした軍隊を揶揄するユーモア小説となっており、「大学出の兵隊」は嘲笑の対象として描かれる。

だが、一九三八年一月の「大学出の兵隊」による陣中座談会になると、彼らを笑いの対象とする表現は見当たらない。⁽⁷⁾新聞紙上には、未完成の博士論文を戦場へ持参し、戦場で加筆して理学博士号を得た兵士を賛美する記事が掲載され、インテリ兵を勇士として扱う記事が目につくようになる。⁽⁸⁾新聞だけではなく、小説でも『従軍記インテリ部隊』⁽⁹⁾では、「インテリ必ずしもひよろひよろとして神経の針のやうな痩せ男とのみは限らぬ」とインテリ部隊を擁護する。そして、「兵隊の強さといふものは、畢竟精神力の問題であるから、徹底した理解と優れた判断をもつものが弱くあり得ない」と賞賛の言葉を続ける。こうした戦場でのインテリ層の兵士を賞揚する傾向は陣中手記にまで及ぶ。岩波文庫を収集していたとして注目された太田慶一『太田伍長の日記』が刊行されたのも一九四〇年のことである。

このように日中戦争開始以降は、新聞や小説においてインテリ層の兵士が優れているというイメージが作り出されていく時期に当たる。太田慶一の日記刊行も、「岩波書店の「インテリ兵士の理念型」創出のイベント」⁽¹⁰⁾であったことが指摘されているように、戦場で博士論文を完成させたり、岩波文庫を読んだりなど、戦場での読書行為や執筆行為はインテリ兵の知的側面を象徴する行為として強調されてきた。

一九四〇年以降陸軍恤兵部によって慰問用に一〇万部の岩波文庫が二回にわたり戦地に送られるが、それは『兵隊』の読者層をさらに裏

付けるものとなる。送られた文庫は、日本文学と海外文学が中心であったことが知られているが、この傾向からは「文芸愛好者」を対象としていることがうかがえる⁽¹¹⁾。このようにインテリ層を優秀な兵士として描き出すと同時に、戦場でインテリ層向けに書物の配給が行われており、戦場で読み、書く兵士に向けられた『兵隊』はこの延長線上に位置付けられるのである。

次節からは、今までに述べてきたような高度なりテラシーを持つ兵士を戦争へと取り込んでいくメディアとして『兵隊』がどのような働きをしていたのか明らかにしていきたい。

二 『兵隊』におけるインテリ兵像

本節では、まず『兵隊』における『ドイツ戦没学生の手紙』を中心とした編集サイドの言説から、紙面でのインテリ兵イメージを考察していき、そのイメージが、兵士が書くことや読むことと、どのように結びついていたのかについて検討する。

キーワードとなるのは精神修養という考え方と投稿雑誌という形態である。『兵隊』はこれらの方法に加え、検閲を行うことで、「自己犠牲を神聖化する兵隊イメージ」を形作ることに貢献していたと言える。また、一部論旨の関係上、『ドイツ戦没学生の手紙』に関する記述について拙論と重複するところがあることを断っておく⁽¹²⁾。

前節で述べたインテリ兵イメージの転換点として、もう一つ『ドイツ戦没学生の手紙』を挙げる事が出来る。『兵隊』には「第一次世

界大戦に参加した「ドイツ戦没学生の手紙」(一〇号)という記事が掲載されており、インテリ兵がどのように描かれていたのか考察する手がかりとなる。『ドイツ戦没学生の手紙』は、フライブルク大学教授ヴィトコップが第一次世界大戦に従軍した学生の手記をまとめた書簡集である。日本ではドイツ語教科書として尾崎賢三郎編『戦地消息』⁽¹³⁾、成瀬無極編『塹壕より故郷へ』⁽¹⁴⁾が使用され、一九三八年一月に岩波新書から高橋健二による日本語訳が刊行される。この高橋版は『きけわだつみのこえ』の編集に参照された書として知られ、「反戦の書」と捉えられてきた。そうした後年の経緯から推測されるように、『ドイツ戦没学生の手紙』に好戦的な文面は少なく、高橋は、「明日しれぬ戦場にあつて、彼ら学生が精神に関することに想いをひそめていくかは、悲愴な戦闘の記述に劣らず、感動である」と高く評価する。

この高橋版で戦場での読書を推奨する編集方針が採られていたことは注意すべきだろう。高橋は「開戦当時、ドイツの本屋では、ゲーテのファウストや、ニイチエのツアラツストラヤ、ヘルダーリンの詩など、第一義的な文学書が盛に売れたという事実は、「戦時中ドイツ文学は塹壕で最も真剣に読まれた」という文学史家の言葉を裏書するものである」と述べ、ドイツ学生にもその様子がうかがえることを指摘する。「古典的価値」を標榜する岩波文庫に対し、「現代人の現代的教養」書としての岩波新書の配本第一回の一冊として企画されたことにこそ『ドイツ戦没学生の手紙』の持つ「現代的」意味もあったといえよう。高橋版では、文学が好まれる空間としての戦場と、それを読む

教養ある兵士たちが描き出されており、『兵隊』での紹介もこうした編集方針が関係していたと考えられる。

『兵隊』には、高橋版から七名のドイツ学生の手記が引用されている。まず目を引くのは、「僕は戦争を非常に悲しむべきこと、思つてゐます。今度も巧妙な外交によつて戦争を避けることが出来た筈だ」と戦争批判が書かれていることである。こうした批判は検閲での削除対象となる可能性が高いが、なぜ免れているのだろうか。

その理由として考えられるのは、戦争で「重大なのは犠牲的精神であ」り、忠実さを求める内容が強調されている点である。記事最後のヴァルター・アンプロゼリの手記では、塹壕の中でフランス兵に手榴弾を投げようとするも、ドイツ兵が前に現れたため投げられず自死した兵士に対し、「賛歌すべき英雄的行為」と表現した箇所のみが抜粋される。いわば戦争という総体を批判することは可能だが、個々の兵士が戦うこと、それ自体を批判することは出来ない点が『兵隊』における検閲のラインと言えよう。こうして戦争を敵との直接的な戦闘ではなく、犠牲となる自己に焦点を当てて描いたところに『兵隊』に掲載された『ドイツ戦没学生の手紙』紹介記事の特徴があり、問題もある。

では、自己犠牲を神聖化する兵隊イメージが展開される一方で、読むことや書くことをめぐる言説はどのように展開され、そのイメージと接続したのだろうか。結論から言えば、検閲や投稿の問題と関連しあひながら、書く行為や読む行為によつて犠牲的行いを神聖化する兵

隊イメージを強化する方向に進んだと言える。

創刊号には刊行目的として、「戦友互に心境を吐露し、紙上に心の友を求め、或は励まし、或は慰め、以て精神修養の一助たらしめると共に、愈々強固なる団結を結成する」(安藤軍司令官「発刊を祝して」)ことが挙げられる。『兵隊』読者の投稿を支えていたのは「精神修養」を主眼とする修養主義や人格主義であり、投稿欄には、「偉業益々発展思想善導精神修養知識の増進に寄与せられんことを」(花田政治郎、三号、一九三九・六・一五)と『兵隊』が人格や知識を養う修養に役立つことを伝える投書が多くみられる。

『兵隊』では、戦場で本を読むことが精神的な成長へと繋がること(14)が標榜される。それは、これまで読むことや書くことに親しんでいた層だけでなく、今まで書き慣れない読者へも積極的な投稿を促すことに寄与しただろう。大濱は投稿を「自由な空間」であったと述べ、編集員の石田一郎も後年に自由で強制はなかったと語つてはいる。⁽¹⁵⁾だが強制の有無に関わらず、戦場にあつて個人による自主規制が存在しなかったとは考えにくい。

加えて「従軍記者の活用について」(一六号、一九四一・一・一)では、報道資料として「陣中美談、佳話」「スケッチ、漫画、詩歌」等を報道部に送るよう呼びかけ、送られた記事は「報道部で検閲するのであるから資料の提供を躊躇する必要はな」と注意される。また掲載作は『写真週報』への転載やラジオ放送に使用されていることからも、検閲の存在は明らかである。⁽¹⁶⁾先の記事中には、「郷土や特定の

新聞」ではなく、「公表を憚かる事項を新聞記者に知得せられた場合」は報道部へ連絡するように注意が促されており、投稿により兵士の声を直接集めることは、戦地での「公表を憚かる」事態が外部に流出する可能性を排除するためであったと推察される。

投稿制度は一見開かれているようにみえるが、その内容は自由なわけではなく、むしろ検閲での削除を忌避する心理が働いたことは想像に難くない。それは掲載に相応しいコードを探しながら読む行為へと繋がり、模倣することで投稿作が画一化されていくことにもなる。雑誌が部隊内で共有されていることも、こうした傾向に拍車をかけたと言えよう。

さらに二六号からは、兵隊文芸賞が創設され、入賞者の講評、賞品授与が開始される。選考基準は「純一さと、逞しい生命力の充溢、貴重な体験の感動の高まりに於いて表現された素朴な様式」（二五号、一九四二・九）であり、「最も実感が溢れ魅力があり、真実性があつて読者の興味を惹く力」がある文学だと定義される。文芸賞の設置は「純粹」で「逞しい」「兵隊文芸」という規範を強化することに結びついただろう。「不死身上等兵」（田中久、二七号）等の戦争英雄譚や犠牲となった兵士を描いた「写真帖」（矢野正俊、三〇号、一九四三・七・一）などに、「兵隊文芸」で求められた「純粹」で「逞しく」自己犠牲を顧みない典型的な兵士像を見いだすことができる。

『兵隊』では、「精神修養」として読むことよって『兵隊』紙面で示される「模範的」兵士イメージが受容され、書くことよってその

イメージを再生産し続けることへと繋がっていった。また、それは戦場での検閲と隣り合わせの出来事でもあったのである。

三 兵隊として書くこと

しかし、前節で述べてきたような典型的な投稿者だけが『兵隊』の読者であったわけではない。むしろ、『兵隊』の投稿作からは戦場におけるインテリ兵の「意識の動員」に関して、より複雑な手続きがとられていたことが予測できる。本節以降では、『兵隊』におけるもう一つの兵士像について考えていく。それは、前節の「兵士として身を立てる」という物語に近接していて明確に分かれているわけではない。だが、編集者への任命方法やいくつかの投稿作からは「兵隊作家として身を立てること」が戦場で兵士として生きるための物語として想像され得ることが分かる。『兵隊』には、戦場だけではなく、銃後の作家活動へ繋がる道が用意されており、そのために「兵隊作家として身を立てること」を旨指す兵士よって多様な作品が投稿されていくのである。

そもそも『兵隊』読者は、前線にいる兵士だけではない。「一般からも将兵の陣中労作を銃後国民にも紹介して欲しいと云ふ注文が殺到」（『編集後記』六号、一九三九・八・一）と伝えられるように、帰還兵や内地文学者に郵送され、銃後は軍事郵便で内地へ送るよう呼びかけられる。こうして『兵隊』は前線兵士の言葉を、銃後に伝えることのできる特別なメディアとして成長していく。

さらに編集者は編集のみではなく、陣中新聞や『写真週報』等に執筆することもあり、編集者は火野によるスカウトや優れた投稿者の中から選出されていた。初期編集者の池田亨は、報道部への配属を「羨望」されたと振り返り（「兵隊出発の回顧」三〇号）、下田徳幸は投稿者から編集者へと転身を遂げる。下田のために火野は広東から「〇里離れた大和市」まで来訪し、部隊長と直接交渉を行ったが、その編集部員時代を下田は「毎日顔を突き合わせながら仕事をしていた期日は全く夢のやう」と語る。火野は九号で編集から退くが、残された編集者の多くは『九州文学』同人でもあり、山辺道夫、風木雲太郎（貞島米親）、安田貞雄、峰絢一郎などがいた。火野も「広東報道部に一緒にいた池田亨、下田徳幸、山辺道夫、貞島米親、安田貞雄の諸君も大いに期待される」と述べるように、編集室には文学を志すある種特権的な場が作られていたのである。のちに『九州文学』で、下田は火野の斡旋によって作家となる道が開けていたことを、次のように語る。

下田や山辺は編集室のある報道部で火野を取り囲み、小林秀雄の評論や火野に対する批評について話し合い、「文学の低調さに就いて」論じあっていた。さらに、「あまり出来のよくない」「作品（小説、詩歌、ルポルタージュ）を、兵隊が」「編集室に持つて来」ても、火野は「何時も心よくそれを受取り、どんなものでも最後まで読んで、親切な感想を述べ」たり、良ければ出版社へ「出来る限りの紹介」を行ったという。いわば『兵隊』は第二の火野葦平となるべく作家を目指す場所であり、火野も「兵隊の中から、一人でも才能と素質のある作家

を発見することを何よりの楽しみとして」いたという。¹⁹⁾

このように『兵隊』では、作家を目指す兵士たちが投稿者となることで、兵士の戦闘経験を正面から描くのではなく、あえて戦場から焦点をずらした空間を描くことに繋がっていく。たとえば入院中の妄想や恐怖を死んでいく兵士の描写と対比させながら描いた「入院の記録」（古友雅男、二八号、一九四三・三）や徐州郊外の日本語学校を描いた「追憶」（高津政一、二七号）では兵士の周辺状況が描かれ、「妹に答ふ」（鈴木文雄、三五号、一九四四・一・一〇）や「めがね」（隅田三平、三五号）、「入隊前夜」（栗原陽一、二七号）など、召集前を振り返った作品がある。一方で「豚」（古友雅男、三〇号）を捕まえるための争いや「鍋蓋」で軒を止めようとする「鍋蓋戦記」（一刀剣二、三四号、一九四三・二・二）など戦場を戯画化した作品も見られる。さらに、兵士以外を創作の主体とする物語も多く「姑娘の日記」（山本健一、二七号）や、「花」（渡邊孝昌、二八号）のように中国人女性の立場から日本兵との交流が描かれる。これら作品には植民地意識や女性観に問題があるものもあるが、兵士が自らの戦場体験以外を物語化していく機会となっていたことは確かである。

例に挙げた掲載作の中には既成作家の作品を模した傾向が見られる。つまり、彼らは『兵隊』以外の書物を参照できたがゆえに、「兵隊文芸」の表明する兵士像の体現された戦記とは異なる視点を提示することとなったのである。こうした掲載小説の傾向を生み出していた要因については、次節で考察していく。

四 兵隊作家モデルとしての火野葦平

収録作の多さから考えても、三節で述べたような投稿作は『兵隊』が求めていたものだとと言える。こうした多様性を保持しながら進行した点に、インテリ兵を戦争に取り込むメディアとしての『兵隊』の特徴がある。本節では、「兵隊作家として身を立てる」ことを目指す兵士たちが、『兵隊』へ投稿することを後押しした火野の役割について考察する。掛野剛史は、火野が『兵隊』投稿者を「書く兵隊」として意識したことが、火野の作品執筆を支えたことを指摘しているが、本節では視点を変え、投稿者にとって火野が兵隊作家のモデルとして受け入れられていたことを明らかにする。そして、報道部もまた火野を兵隊作家のモデルとする目論見があったことを指摘したい。

掛野も紹介した三浦北春による「書かざる葦平」（一四号、一九四〇・四）は、火野のように書くことを目指す兵士を伝える興味深い一挿話である。主人公は三浦の分身である文学好きな「H一等兵」で手帖を広げぼんやりする姿を曹長から「葦平に似て居る」と指摘され、葦平と呼ばれるようになる。その結果、彼は何かを書くことと苦心するのだが、結局「終日ペンを握り天を仰いで、嘆息している」という筋だ。

物語内だけでなく投稿作には火野作品を模倣したものも多く見られ、すでに一号から、兵隊三部作『麦と兵隊』『花と兵隊』『土と兵隊』を模倣した「馬と兵隊」（小方実）がある。兵隊ともう一つのを

タイトルに掲げ、クローズアップして叙述する火野のスタイルは、投稿者の良き見本となっていた。その後も「馬と兵隊」（妻崎実吉、三号）、「老婆と兵隊」（福田福一、二一号）、「煙草と兵隊」（古川克巳、一四号）などタイトルを模倣し、「兵隊」との関係性が描き出されている。なかには戦争による環境変化を「戦争と変革」と題して「火野先生の小説にでもなる題材だ」（津村古兵、九号）と述べる兵士までも現れる。「兵隊」ともう一つの対象を描くだけではなく、戦争にまつわる物事を書くこと自体が「火野先生の小説」であると感ぜられているのである。

さらに、火野の『怪談宋公館』に描かれた伝説を实地調査し、怪談の種明かしをする鈴木文雄「拾遺宋公館」（三八号、一九四四・四）のような作品が掲載されることもあった。筆者は怪談を読んで宋公館へ確認にくる兵士のために書いており、火野作品の戦地での影響力の高さを示している。また、火野を範にする作品は絵にも及び『土と兵隊』に酷似した泥濘の場面が「支那兵の土と兵隊」（八号）として描かれる。このように火野葦平の作品群は、兵士の創作の様々な側面で影響を与えていたことが分かってくる。

馬淵逸雄が「戦う将兵と同じ気持になって、戦った経験のある作家が欲しかった」²¹⁾と任命理由を語るように、そもそも火野を初代編集長としたのは、書く兵士の手本とするためであった。そこには、「軍人」として戦場を踏んだものでなければ、あゝした偉大な又は異常な世界は本当に書ける筈がない」²²⁾という「戦争文学」に対する馬淵の考えが

ある。そのなかには、投稿者から第二の火野として活躍する兵隊作家を探す目論見もあっただろう。思惑通り、火野が『兵隊』読者たちに対し強い求心力を持っていたことは見てきた通りである。

さらに、兵隊作家として注目を浴びてきた兵士が、帰還により書けなくなったことが伝えられたことも、火野の兵隊作家モデルを強化したといえる。上田廣は「戦地より帰りて」（一一号）で今後の「文学生活」への不安を露わにするが、それは「文学生活」を可能とした戦場から離れたためであった。「才能のない作家は才能の外で生きなければならぬ」のに、「平凡な一鉄道従業員」では、「生活の文学的対象に命をかけることが出来」ないと上田は戸惑う。兵隊作家の帰還後の違和感は度々吐露され、こうした声は兵士たちに戦場にいる間に書くべきだとの意識をもたらし、何よりも火野葦平こそが兵隊作家モデルとして相応しいという意識を強くしただろう。

『兵隊』には「兵隊作家として身を立てよう」とする兵士が集まり、第二の火野葦平への道が開かれ、報道部もまた火野葦平を編集長に据え、兵隊作家のモデルとなるべきだと考えていた。だからこそ、『兵隊』には、「兵隊文芸」の枠から外れていくような作品が掲載され、それは読み、書く兵士が戦争へ参加する意義付けにもなったのである。

五 兵隊から作家へ

しかし、『兵隊』から火野葦平を継ぐ兵隊作家は誕生せず、むしろ徐々に従軍作家を中心とした内地の文学者の執筆が増加する。本節では、『兵隊』において投稿者としての兵士から作家へと、編集サイドの視点が変化した背景を明らかにする。それは、編集部の思想統制強化と文学者による兵隊作家批判と関連している。「兵隊作家として身を立てる」道が閉ざされていくまでの経緯を追ってみたい。

まずは、兵士から作家へと『兵隊』執筆者が変化する時期を編集サイドの変化と照らしあわせながら確認していく。一九四一年一〇月に編集サイドに大きな変化が起こる。東条英機との齟齬による馬淵逸雄の報道部長の退任である。火野を報道部に呼び寄せ、兵隊作家を重用した馬淵の転出は投稿者の雑誌内での地位に影響を与えたと考えられよう。退任直後の二三号（一九四一・一二）から『兵隊』は戦況の悪化により一端休刊しているため、継続した変化を追うことはできない。だが、半年後の一九四二年五月の復刊を境に火野葦平や帰還作家だけではなく、高村光太郎、尾崎一雄、坪田譲治、海野十三、獅子文六、北原武夫、長谷川伸、舟橋聖一、谷川徹三、片岡鉄兵が執筆者に名を連ねるようになる。投稿作も戦況の安定により一端増加しているが、掲載順序や編集後記からは編集部が文学者を重視していることがうかがえる。そして、後年には投稿数も減少してしまふ。

加えて、兵士から作家へと執筆者が移行する一九四二年九月頃に編

集部で思想調査が行われたことが陸軍史料から分かる。「大陸及南方方面渡航左翼要注意者二関スル件報告」⁽²⁴⁾には、下田徳幸の編集部着任以降、左翼要注意者として動向が監視され続け、「部内ヨリ左翼関係分子ヲ免除スヘキ」との方針から解雇が決定されたこと、大阪朝日新聞社記者として帰還する旨が記されている。

『兵隊』から唯一刊行された詩集『兵隊の祝祭』（一九四三年）からは、こうした思想傾向の変化と執筆者の関連がよく分かる。この詩集は本来、九号で兵隊文芸書として散文も含めた刊行が予告されていたが、その後刊行されず、結局内容を短詩型文学のみに縮小することで発売され、坪井秀人によって「全体的に月並みな国体イデオロギーが浸透して」⁽²⁵⁾いると指摘されている。それは、火野のような兵隊作家として世に出る道が大きく狭められた証でもあった。

兵隊作家に対する視線が厳しくなったのは、編集サイドだけの問題ではない。この時期、内地文壇では兵隊作家を批判する声が挙がっている。一九四〇年以降「出版新体制」が築かれ、統制の手綱が強められていくと、兵隊文学を含む戦争関連書籍の飽和状態に対し、不満の声が一部の文学者から挙がってくる。

これまで見てきたように火野葦平は兵隊文学の擁護者であり、戦後も兵士に寄り添う態度をとっていた。だが、一九四三年の座談会で、火野は戦争文学を「素人文学」と呼び、「最近私などのところにもいろいろな原稿を送つて来たりするのがあるまして、すぐ有名になつて、作家に成れる」といふやうな簡単な考を有つ軽薄な向きが非常に増え

た」と述べる。そして、「自分の体験を書いたものがすぐ本になつたり、戦地で何かして来た体験を書くとき本になつたり、そんなことがしばらくあつたので、簡単に出版が出来るかと考へている」⁽²⁶⁾と批判する。この発言はまさに『兵隊』投稿者たちへの批判ととれる。

火野だけではなく、川端康成も「ルポルタージュ」は「ほんとは文学ではない」⁽²⁷⁾と指摘する。そして「本当の兵隊さんの中から第二の火野葦平」⁽²⁸⁾が「現れたのを知ら」ず、「兵隊といふものと、作家といふものは両立しない」⁽²⁹⁾とさえ言われるようになるのである。

『兵隊』は積極的に内地に送られ、その評判を伝えていたことから、文壇側の批判を敏感に察知し、兵隊作家モデルである火野の変化は、兵隊作家に対する対応を一層厳しいものとしただろう。

一九四三年の二九号には、これまで許容されてきた多様な兵隊作家としてのあり方を否定するように、「われ／＼の希ひは、同胞一億のいなく、あのまぶしいばかりに理念化された立派な「兵隊」に、身を寄せ近づくことだ」との巻頭言が掲げられる。このように、太平洋戦争開始以降、編集サイドの変化と共に兵隊作家が徐々に後景に退いていく。戦況の悪化によって、「兵隊作家として身を立てる」という兵士たちが想像し得た道も閉ざされていったのである。

おわりに

本稿では、『兵隊』におけるインテリ層の兵士による読書・執筆行為を考察し、『兵隊』が精神修養と投稿という制度によって、インテ

リ層の兵士を戦争に取り込むメディアとして成立していたことを明らかにしてきた。それは、強固な検閲を繰り返す方法ではなく、強制力を伴わない緩やかな統制となっていた所に特徴がある。

緩やかな統制は『兵隊』紙面で、インテリ兵に向け「兵士として身を立てる方法」と「兵隊作家として身を立てる方法」という二つの兵士像が提示されたことよって促進されたと言える。前者は、自己犠牲を神聖化する兵士像として受容され、兵士の「意識の動員」へと繋がり、後者は、火野葦平を兵隊作家モデルとして提示することで、書き、読む兵士として戦うことが認められ、戦争参加への意義付けが行われたのである。「兵士」としてのアイデンティティだけではなく、「兵隊作家」としてのそれを選択する余地を残していたところに、インテリ兵を取り込むメディアとしての『兵隊』の特性がある。だが、インテリ兵たちによる投稿が続けられたにも関わらず、編集部は内地作家の重用を開始する。それは、兵隊作家として生きる道が断たれ、犠牲的で理想的な兵士のみが求められる空間の到来でもあった。

しかしながら、ここで論じてきた『兵隊』は一つの側面であることにも注意しておきたい。戦場において書かれたものの多くは韻文であり、『陣中倶楽部』や『兵隊』においても幅広く投稿が呼びかけられていた。その他にも陣中新聞などに韻文は掲載されており、短詩型文芸を戦場で書くということはより広い範囲での考察が要求される。

また、本稿で述べてきた戦場における教養的で自己修練を目的とした読書行為による緩やかな統制には、戦時下の学生の読書統制の方

法と同じ点が認められる。こうした経緯は拙論⁽³⁰⁾にて詳説しているが、一九四〇年以降、学生に対する読書指導は日本出版文化協会や日本出版会、文部省による推薦図書制度によって行われていた。その指導は教養的、人格主義的な読書方法を否定するものではなく、読書が戦場でも続けられることを前提とし、むしろそれを利用する形で行われていた所に特徴がある。

さらに、戦場で行われたこうした読書行為は、戦後になって急激にそのイメージを反転させていく。『兵隊』の中で自己犠牲を英雄視する学生の姿を描き出した『ドイツ戦没学生の手紙』は、戦後になると『きけ わだつみのこえ』の見本となり、「反戦の書」として定着していく。そうした転換がどのように、何によってなされたのか、より検証していくこととしたい。

注1) 大濱徹也「解題」『兵隊の眼』刀水書房、二〇〇四・七

2) 金井景子「前線」と「銃後」ジェンダー編成をめぐって―投稿雑誌『兵隊』とリーフレット『輝く』を中心に―『岩波講座3アジア・太平洋戦争動員・抵抗・翼賛』岩波書店、二〇〇一・六

3) 拙稿「慰問雑誌にみる戦場の読書空間―陣中倶楽部」と『兵隊』を中心に―『出版研究』四五、二〇一五・三

4) 注三に同じ。

5) 竹添敦子「山本周五郎と『陣中倶楽部』」『三重法経』110、一九九八

6) 奥野他見男「大学出の兵隊さん」玉井清文堂、一九二八・九

7) 「僕は大学出の兵隊」『東京朝日新聞』一九三八・一一・二九、夕刊二面

8) 「陣中で理博インテリ上等兵に快報」『東京朝日新聞』一九四〇・

緩やかな動員のためのメディア（中野）

五〇

- 二一・三〇、朝刊三面
- (9) 池田源治『従軍記インテリ部隊』中央公論社、一九四〇・四
- (10) 佐藤卓巳『物語岩波書店百年史2』岩波書店、二〇一三・一〇
- (11) ・一九四〇年岩波文庫二〇点、各五千部
- 志賀直哉『小僧の神様』『万暦赤絵』夏目漱石『虞美人草』、徳富健次郎『黒い眼と茶色の目』、徳田秋声『あらくれ』、泉鏡花『注文帳・白鷺』、永井荷風『おかめ笹』。中勘助『銀の匙』、ハドスン『緑の館』、トウエーン『王子と乞食』、ウエブスター『あしながおじさん』、トオマ『悪童物語』、バルザック『知られざる傑作』、メリメ『コロンバ』、ドーデー『陽気なタルタラン』、ジョルジュ・サンド『愛の妖精』、フローベール『三つの物語』、プーシキン『大尉の娘』、アラルコン『三角帽子』、スピリ『アルプスの山の娘』
- ・一九四二年一〇点、各二万部
- 森鷗外『高瀬舟』、幸田露伴『五重塔』、尾崎紅葉『二人女房』、国木田独步『武蔵野』、島崎藤村『千曲川のスケッチ』、泉鏡花『歌行燈』、パウロ・ハイゼ『忘れられた言葉』、ヘッセ『漂泊の魂』、ラファイエット夫人『クレヴの奥方』、スタンダール『カストロの尼』
- (12) 〔岩波文庫総目録1927-1987〕岩波書店、一九八七・七）
- 拙稿『読書する学徒兵の起源』『近代文学第二次研究と資料』5、二〇一・三
- (13) 尾崎賢三郎編『戦地消息』南山堂書店、一九三四・一一
- (14) 成瀬無極編『聖壕より故郷へ』春陽堂、一九三五・八
- (15) 石田一郎、大濱徹也、鈴木正夫『兵隊の投稿雑誌』『兵隊』をめぐって『刀水』6、刀水書房、二〇〇二・五
- (16) 「全支の兵隊が作った『写真週報』」（一七号）など。南支戦線から銃後へのラジオ放送では編集部は協力の下、朗読や演奏、放送劇が「兵隊文芸の夕」として放送された（二〇号）。
- (17) 下田徳幸『火野葦平の思ひ出』『九州文学』一九三八・三
- (18) 火野葦平『雑談』『九州文学』一九四〇・三
- (19) 注一七に同じ。
- (20) 掛野剛史『書く兵隊・戦う兵隊―火野葦平と雑誌『兵隊』』『アジア遊学』勉誠出版、二〇一三・八
- (21) 馬淵逸雄、火野葦平『名作『麦と兵隊』の出来るまで』『東海人』一九五三・九
- (22) 馬淵逸雄『報道戦線』改造社、一九四一・八
- (23) 西岡香織『報道戦線から見た『日中戦争』芙蓉書房出版、一九九六・六
- (24) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C1000681200、一九四二・九・一四、『大陸及南方方面渡航左翼要注意者に関する件』（防衛庁防衛研究所）
- (25) 坪井秀人『声の祝祭』名古屋大学出版会、一九九七・八
- (26) 志賀直哉、武者小路実篤、岩田豊雄、火野葦平『文学、その他』『改造』一九四三・四
- (27) 川端康成『日本文学の現美』『新潮』一九四三・一
- (28) 『文芸時観』『新潮』一九四三・一
- (29) 寺崎浩『作家精神と軍人精神』『新潮』一九四三・五
- (30) 拙稿『戦時下学生の読書行為』『日本文学』61(11)二〇一・一一／『柔らかな統制』としての推薦図書制度』『Intelligence』15、二〇一五・三

本研究は、日本学術振興会特別研究員（PD）科学研究費補助金（特別研究員奨励費）の支援を受けている。